



Title	松花堂に現存する竈の特徴：竈に嵌め込まれた丸瓦を中心に
Author(s)	佐藤, 悦子
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89281
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

松花堂に現存する竈の特徴

竈に嵌め込まれた丸瓦を中心に

佐藤 悦子 京都工芸繊維大学大学院在学

はじめに

江戸時代に創建された松花堂は、松花堂昭乗（1584-1639、以後昭乗）が創建した庵である。松花堂は「竈」という要素を茶室や庭園、そして日常生活空間と融合しながら調和させた独特の構造を持っている。松花堂そのものが茶室にもなり、庵にもなる、その当時としても斬新な構造を成していたと思われる。

明治の廃仏毀釈により松花堂は破却されたが、その後三度の移築により現在、松花堂・庭園美術館内で一般公開されている。

現存する松花堂の玄関土間に設えた竈の意匠は創建者である昭乗自らが造り備えたのかどうかを考察することで昭乗が伝えたかったメッセージ性を調査研究することである。

松花堂の沿革と昭乗の生涯

松花堂は石清水八幡宮の塔頭の一つである瀧本坊の住職であり阿闍梨でもあった昭乗が1637年に隠居をするために創建した草庵である。昭乗は江戸時代の三筆として名高く、また絵や茶道にも造詣が深く、この庵は彼の芸術家としての美意識が生活空間に大きく影響を与えたと考えられる。廃仏毀釈により松花堂は破却されたが、移築され、

	所有者	所有した年月	所在地
1	大谷治磨	1874～1880	八幡の山麓に移築。
2	未詳	1880～1891	西車塚古墳前に移築。
3	井上伊三郎とその一族	1891～1948	八幡市八幡女郎花43-1に移築。東車塚古墳の地。
4	未詳	1948～1963	昭和20年代後半所有者が変遷。
5	塚本清	1963～1977	同上。隣接する土地を取得造成。
6	八幡市が公有化	1977～現在に至る	同上。隣接する土地を取得造成。 「八幡市松花堂・庭園美術館」として一般公開。

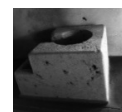
その後、下記の表に示すように所有者が変遷した。

竈の丸瓦に関する情報と分析

松花堂に現存する竈の意匠は武野紹鷗（1502-1555）が確立したとされる「竈土構^{くどがまえ}」の様式を取り入れた茶室である。京都府に現存する「竈土構」を取り入れた茶室6箇所¹で10基を調査した。



高台寺・傘亭



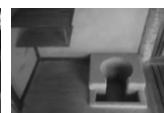
高台寺・時雨亭



桂離宮・松琴亭



桂離宮・笑意軒



桂離宮・月波楼

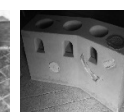


桂離宮・賞花亭

上記6基の竈には瓦片は嵌め込まれていない。



金閣寺・夕佳亭 松花堂

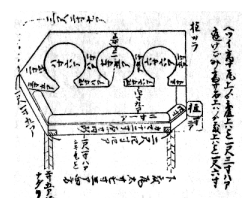


東本願寺・縮遠亭 今中家



上記4基には瓦片が嵌め込まれている。竈に瓦片を入れることで、松花堂の場合、装飾を通して多くの芸術的また宗教的メッセージが加えられたと推測される。（竈の写真は創建年順に掲載した。）

右の図は「松花堂おこし絵図の附図」として1861-1864（文久時代）に作成された松花堂の竈の平面図である。



文化財の修復に携わる左官業の方の談によると

「文久時代の『松花堂おこし絵図の附図』の竈の平面図は俯瞰図を伴う製図であり、側面においては見本になる竈があれば製作可能な竈であることから、側面図が書いていないのは実物の竈があったのであろうと推測される。移築をするということは、出来るだけ元の姿に戻そうとして移築する。その中で竈だけ違う意匠にしようという考え方はあり得ないことであることから、竈も元の姿にしようとし掛けものである。また、意匠の変更がある時にのみ、その箇所を記述する」とのことである。江戸時代に流行ったとされる竈に奈良県生駒郡窪田の中家に現存する「持ち出し竈」がある。大和川が氾濫すると水害をうけることから、地域の人達に貸だすことのできる竈は松花堂の平面図（文久時代）の竈に酷似している。修復の際に台に載せ、製作変更したおりの図のようである。

松花堂の竈に嵌め込まれた丸瓦の調査分析



上記は江戸時代の丸瓦である。「恵心院」は「真言智宗山派・朝日山・恵心院」で、ほぼ間違いなく判明。「菊紋」の3種類の丸瓦は石清水八幡宮の大塔の近くに散乱していた丸瓦と推測される。「杉」と描かれた丸瓦は「石清水八幡宮の塔頭であった杉本坊」の丸瓦と推測される。

「恵心院」は宇治茶の茶摘み初日10日前に「火除の祈禱をする」と言う寺院であり、この行事を取り仕切っていたのが宇治茶師である。

昭乗の姉妹が嫁いだのが星野家という宇治茶師であったようである。また、昭乗の兄である中沼左京（1579-1655）の妻が小堀遠州（1579-1647）の妻の妹にあたり縁戚関係にある。先述した5箇所（今中家を除く）9基の茶室において、何らかの形で小堀遠州が関わっており、松花堂の竈は様式や意匠に共通性があることから遠州関わった

可能性が大いにある。

廃仏毀釈後、最終の移築者である井上伊三郎の実弟で今中伊兵衛の造った竈は、松花堂の竈に酷似している。今中伊兵衛は「松花堂の竈と同じものを自邸に造りたかった」と聞いている。同様に三井財閥をささえた実業家で茶人でもある益田鈍翁（1848-1938）が西村芳次郎（1868-1939、松花堂の最終移築者である井上伊三郎が養子に出した実子である）に「松花堂の竈と同様のものを小田原の自邸の茶室に設えたい」と依頼した手紙が西村家に残っている。また、最後の移築者である井上伊三郎の先祖が松花堂の隣の井上坊に住まいしていたと考えられることから（井上坊には太閤及び徳川初期三代の朱印文書があった）、代々松花堂に関しての情報は伝えられ、1835年に生まれた井上伊三郎（1835-1908）は幼少の頃から松花堂へ行く機会を持ち、江戸時代に造られた竈を常時見ていたと考えられる。

総括と結論

「竈土構」の様式を取り入れた竈の意匠について、10基を調査分析した。

松花堂の竈における丸瓦の意匠性について、「恵心院」は昭乗と同じ密教寺院というだけでなく、宇治茶師の歴史の中で「火除けの祈禱」をするという重要な行事を担っており、昭乗の姉妹が宇治茶師の星野家に嫁いでいることから昭乗と星野家、恵心院は密接な関係にある。

昭乗が自らの宗教的、芸術的メッセージを竈の意匠として導入したのではないかとの推測が成り立つ。

最後の移築者である井上伊三郎（国学者で能筆家）が松花堂に竈を設えた折に先祖から聞き、見覚えていたことが移築のうちに、創建当時の意匠に戻す切っ掛けになったと考えられる。以上の推論から松花堂の竈の丸瓦は、創建当初から嵌め込まれていたと考えることが妥当である。